

6か月～4歳の小児に対する新型コロナワクチンを含めた予防接種スケジュールについて

2022年11月21日

日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会

1. はじめに

6か月～4歳の小児に対する新型コロナワクチンは、2022年10月24日から予防接種法上の特例臨時接種として接種が開始されました。これを受けて、同時期に接種することが多い定期の予防接種（以下、定期接種）等を含めた接種スケジュールについて具体的な例を示します。

2. 6か月～4歳の小児に対する新型コロナワクチンの接種スケジュール

5歳以上の小児では、初回接種（初回免疫）の回数は2回ですが、6か月～4歳の小児では、初回接種（初回免疫）として3回の接種が必要となります。なお、皮下接種するその他の定期接種ワクチンと異なり、新型コロナワクチンは筋肉内への接種（筋注）になります。

1回目接種後通常3週間あけて2回目を接種し、2回目接種後8週間あけて3回目を接種します。通常の接種間隔を超えた場合には、なるべく速やかに接種することになっており、接種間隔の上限はありません。

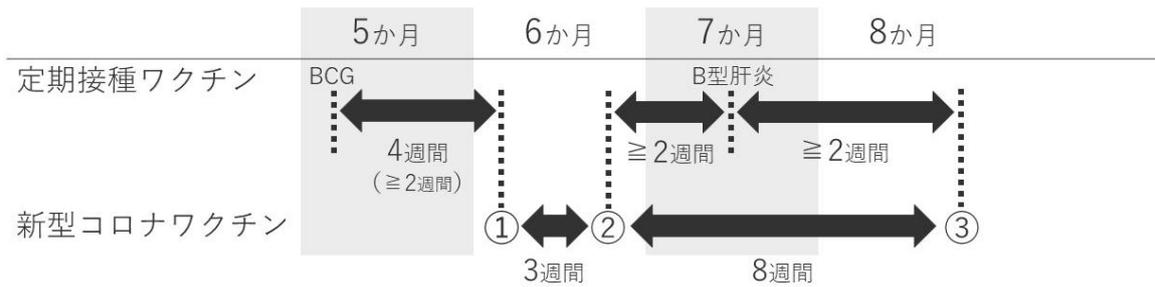
他のワクチンとの接種間隔は、季節性インフルエンザワクチンのみ接種間隔に規定がなく、同時接種を含めていつでも接種可能ですが、その他のワクチンとは、原則として前後13日以上の間隔をあけて接種することになっています。

日本小児科学会は、定期接種のワクチンを優先し、それらの接種機会を確保したうえで、新型コロナワクチンの接種をしていただきたいと考えています。

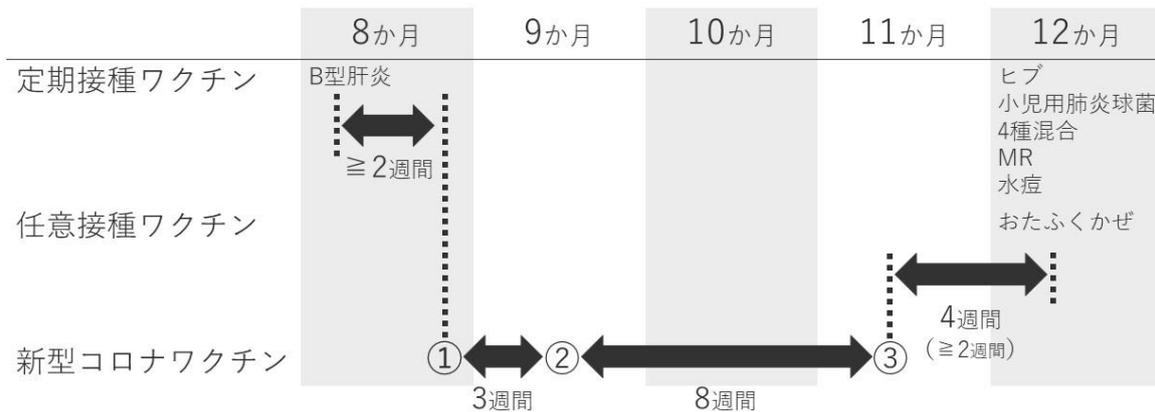
注射の生ワクチン（以下、注射生ワクチン）である、BCGワクチン、麻しん風しん混合ワクチン（以下、MRワクチン）、水痘ワクチン、おたふくかぜワクチンを接種した場合は、27日以上の間隔をおいて別の種類の注射生ワクチンを接種できることになっています。新型コロナワクチンは生ワクチンではありませんが、MRワクチン、水痘ワクチン、おたふくかぜワクチン接種後ワクチンウイルスが体内で増殖する時期や、接種後の発熱、発疹、耳下腺腫脹等の症状が好発する時期を避けて、可能であれば接種後4週間程度は、新型コロナワクチンの接種を避けることが望ましいと考えます。また、B型肝炎、ヒブ、小児用肺炎球菌、4種混合ワクチンは0～1歳で複数回の接種が必要なワクチンですが、同じワクチンを連続して接種する場合、推奨の接種間隔がありますので、前回接種との間隔にも注意が必要です。

以下、接種スケジュールの一例を示します。なお、体調がすぐれない場合は、体調が回復してから接種することが大切です。

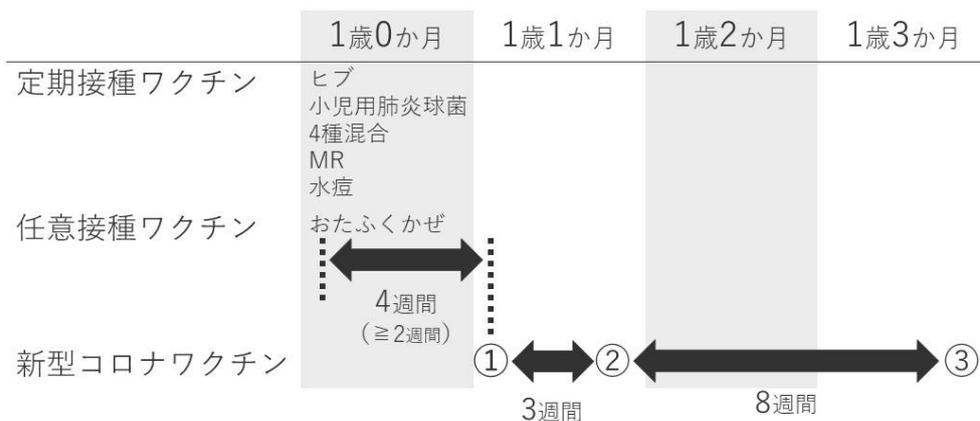
生後6か月の接種例



生後8か月の接種例



生後12か月の接種例



標準的な接種時期

- BCG 5~7か月で接種
- B型肝炎3回目 7~8か月で接種、B型肝炎1回目から20週以上あける
- ヒブ4回目 1歳をこえたら接種、ヒブ3回目から7か月以上あける
- 小児用肺炎球菌4回目 1歳から1歳3か月で接種、肺炎球菌3回目から60日(2か月)以上あける
- 4種混合4回目 4種混合3回目から6か月以上あけて接種
- MR1回目 1歳以上2歳未満に接種
- 水痘1回目 生後12か月から15か月に接種
- おたふくかぜ1回目 1歳を過ぎたら早期に接種